

《研究ノート》

# 加計呂麻諸島における地域住民の生活と福祉ニーズ

— 経年比較にみる一般成人調査より — (1)

田中 安平・小窪 輝吉・岩崎 房子  
田畑 洋一・高山 忠雄

# 加計呂麻諸島における地域住民の生活と福祉ニーズ

## — 経年比較にみる一般成人調査より — (1)

田中 安平・小窪 輝吉・岩崎 房子  
田畑 洋一・高山 忠雄

和文抄録：鹿児島県の離島である奄美大島の南部に位置している瀬戸内町は、大島本島から更に海を隔てて3つの離島を行政区に持っている。2004年の調査時において、加計呂麻島：芝地区60.91%・花富地区75.0%、請島：請阿室58.0%・池地55.7%、与路島：52.9%は超高齢社会となっており、集落の存続自体が危うい状況にあった。

8年後の2012年にこれらの地域がどのような状況になっているのか、平成26年3月に作成した調査報告書と比較検討することでみえてきた問題点・課題点、有効な対策について論述する。

キーワード：加計呂麻諸島、経年比較、生きがい感

### はじめに

鹿児島本土から南へ380km離れた奄美大島の南部に位置している瀬戸内町は、大島本島から更に海を隔てて3つの離島を行政区に持つ特殊な町である。町役場のある古仁屋からフェリーで25分のところに、集落が31ある加計呂麻島は細長く横たわっており、両島で複雑に入り組んだ大島海峡を形づくっている。加計呂麻島からさらに南に海を隔てたところに請島がある。請島には請阿室・池地の2集落があり、古仁屋からフェリーでそれぞれ45分、1時間1分（請阿室から16分）の距離にある。また、池地から16分の海路を隔てた与路島は集落が1つの島で、古仁屋からは1時間17分かかる。

大島本島からさらに海を渡るこれら3島は、奄美大島特有の台風や低気圧の影響を受けやすく、外海を渡るフェリーの欠航等が頻繁に発生し、住民にとっては生活するうえで不安定であり、不自由な要素となっている。

また、これら3島は2004年の調査時において加計呂麻島：芝集落60.91%、花富集落75.0%、請島：請阿室58.0%、池地55.7%、与路島：52.9%の超高齢社会であり集落の存続自体が危うい状況にあった。8年後の2012年にこれらの地域がどのような状況になっているか、平成26年3月に作成した報告書と比較検討することでみえてきた問題点・課題点、有効な対策について論述する。

## I 研究目的と方法

### 1 研究目的

2004年の同時期に調査した65歳以上の高齢者に対する調査で、「自分たちが若いうちは高齢者の面倒を見てこ

られたが、自分たちが高齢になった今、互いに助け合おうにも体力的に困難であり、さらに自分たちの面倒を見てくれる若者がいないという現実直面している」という結果報告がなされていたが、超高齢社会であった集落が8年後にどのように変化してきているかを2012年の調査結果と比較検討することで、そこから新たな問題点・課題点を分析するとともに、今後の集落の存続の有り方について手がかりを探ろうとするものである。

## 2 研究方法

平成15年度から平成17年度にかけ、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「離島の離島における高齢者の自立生活と地域の役割に関する研究—奄美大島瀬戸内町の加計呂麻島（花富集落・芝集落）、請島、与路島の高齢者調査を通して」の研究成果として平成18年3月に報告書を作成した。また、平成23年度から平成25年度にかけ、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究（B）「琉球弧における地域文化の再考と地域再生プランおよび実践モデル化に関する研究」の研究成果として平成26年3月に報告書を作成した。

今般、限界を乗り越えて消滅していてもおかしくないと思われる状況にあるこれらの集落が、どのような要因でどのように存続しているのか因子を分析することで、新たな問題点・課題点、今後への有効な対策を見出すために、両研究に共通する奄美大島瀬戸内町の加計呂麻島、請島、与路島の一般成人調査のデータを経年比較することにした。

### (1) 調査対象者

2004年の調査対象者は、瀬戸内町の加計呂麻島、請島、与路島に居住する20歳以上65歳未満の一般成人で、加計呂麻島は請島、与路島に類した人口の少ない花富集落・芝集落の2集落、請島では請阿室集落・池地集落の2集落、与路島では与路集落を調査対象地とした。

2012年の調査対象者も、瀬戸内町の加計呂麻島、請島、与路島に居住する20歳以上65歳未満の一般成人で、加計呂麻島は3集落（芝集落・花富集落・西阿室集落）、請島では請阿室集落・池地集落の2集落、与路島では与路集落を調査対象地とした。

2004年の回答者は、加計呂麻島2集落で17人、請島2集落・与路島1集落で41人の58人であった。2012年の請島2集落・与路島1集落の回答者は59人で、加計呂麻島3集落の回答者が61人であった。

加計呂麻島に関しては、2012年の調査が「奄美諸島と八重山諸島の島嶼都市部と島嶼集落部の比較」を念頭に置いて実施されている関係上、人口の多い集落（回答者61人）が調査対象地に含まれている点で、2004年の調査と単純に比較できない状況にあるが、前回の加計呂麻島2集落は環境的にも請島2集落・与路島1集落と類似しており、2012年の調査から加計呂麻島を除いた結果と、2004年の加計呂麻島2集落を加えた調査結果の比較をすることにした。100%の整合性があるとはいえないまでも、経年比較をすることで、何らかの有益な示唆が与えられると確信するからである。

### (2) 調査方法

2004年の調査では、加計呂麻島からは請島・与路島に似た集落数の花富・芝集落を任意に選定し、集落数の少ない与路島・請島においても、20歳以上65歳未満の一般成人のいる全世帯を対象に郵送調査を行った。165人を対象にして、58人からの回答を得た（回収率35.1%）。調査時期は2004年10月～11月であった。

2012年の調査では、民生委員に調査票を配布してもらい、調査対象者各自が郵便で返送する配布プラス郵送法で行った。調査対象者の選定に関しては、「民生委員の自宅から近い順に対象者を指定人数分選ぶ。選ばれた対象者に調査協力をお願いし、調査票を預ける。調査対象とした人を2回訪問して会えず、会うことが困難であると判断した場合はそこで中止する。新たに別の人を調査対象者とはしない。回答した調査票を各自で郵送するよう依頼する」というものであった。

全体で743人を対象にして485人から回答を得た（回収率65.0%）。調査時期は2012年10月中旬～11月中旬であった。

### (3) 比較方法

2004年、2012年の調査により得られたデータを併記することで比較検討資料とし、差異・変化を分析することにした。

元データの分析方法、倫理的配慮に関しては下記のようなになる。

### 3. 分析方法

2004年、2012年共に、調査票により回収したデータは単純集計で全体の状況を把握するとともに、聞き取り調査によって得られた情報と重ね合わせることで、分析結果の精緻化・適切化に努めた。また結果の概要・提言では、2004年の調査との経年比較を念頭に置きながら分析した。統計ソフトは、IBM SPSS Statistics 19を使用した。

### 4. 倫理的配慮

研究の趣旨及び調査票は無記名で、統計的に処理する。回答は自由であり、個人のプライバシー保護には細心の配慮をしている等調査票に明記した。また、本研究の研究対象者に対する倫理的配慮について、鹿児島国際大学教育研究倫理審査委員会による承認の審査を得たうえで実施した。

## II 調査結果

### 1 調査対象者の属性

#### 1) 居住地

2004年の調査対象の回答者は、加計呂麻島2集落で17人、請島2集落・与路島1集落で41人の58人で、2012年は請島2集落・与路島1集落の回答者59人を集計対象とし、加計呂麻島3集落の回答者61人を除外している。

表1 居住地

	2004年			2012年		
	男性	女性	合計	男性	女性	合計
加計呂麻	8	9	17	-	-	-
請島	14	13	27	14	14	28
与路島	7	7	14	16	15	31
合計	29	29	58	30	29	59

#### 2) 性別

男女差においては、2004年と2012年との差異はなかった。

表2 性別

	男	女	合計
2004年	50.0% (29)	50.0% (29)	100.0% (58)
2012年	50.8% (30)	49.2% (29)	100.0% (59)

#### 3) 世帯状況

世帯状況において、夫婦のみ世帯・夫婦と子供世帯が2004年に比べ1.5倍に増え、独身で親と同居が8.5%と2004年の54.8%に減少している。二世帯世帯が7.0ポイントも増加していることは、人口減に何らかの歯止めがかかっているという事でもある。結婚に結びつける要因がどこにあるのかは、今回の比較調査では明確でない。その他には、別居・単身赴任・母子世帯等が含まれている。

表3 世帯状況

	一人暮らし	夫婦のみ(内縁関係含む)	夫婦と子供(二世帯世帯)	独身で親と同居	夫婦で親と同居	その他	合計
2004年	25.9% (15)	27.6% (16)	13.8% (8)	15.5% (9)	1.7% (1)	15.5% (9)	100.0% (58)
2012年	22.0% (13)	42.4% (25)	20.3% (12)	8.5% (5)	1.7% (1)	5.1% (3)	100.0% (59)

## 2 親の状況

### 1) 親の健在状況

自分・配偶者の親がいる人は2004年に比べ1.4倍に増加しているが、親なしも2004年に比べ、1.1倍に増加している。

表4 親の健在状況

	親なし	自分の親はいる	配偶者の親はいる	自分・配偶者の親がいる	合計
2004年	20.7% (12)	46.6% (27)	8.6% (5)	24.1% (14)	100.0% (58)
2012年	23.7% (14)	37.3% (22)	5.1% (3)	33.9% (20)	100.0% (59)

### 2) 親の所在地

2004年に比べ、2012年は同居率で68.0%も減少し、同じ市町村内は1.6倍も増加し、県外も1.8倍増加している。その他は病院・施設入所などである。

表5 親の所在地

	同居	同じ市町村内	県内	県外	その他	合計
2004年	27.7% (18)	20.0% (13)	36.9% (24)	7.7% (5)	7.7% (5)	100.0% (65)
2012年	10.3% (6)	31.0% (18)	39.7% (23)	13.8% (8)	5.2% (3)	100.0% (58)

### 3) 親が日常生活の大部分を他者の世話(要介護3~5の状態)を必要とする状態になったとき望む介護形態

親が日常生活の大部分を他者の世話(要介護3~5の状態)を必要とする状態になったとき、あなたはどのような介護形態を望むか質問した。

親の介護に対して、男性の場合、2004年は1位であった「介護施設入所(特養・ケアハウス等)」が2012年は第2位に、2004年第3位であった「家族介護中心に介護サービスを利用する」が1位になっている。女性の場合、2004年1位であった「家族介護中心に介護サービスを利用する」が2位に、同率2位であった「介護サービス中心に家族介護を利用する」が1位になっている。また、家族介護のみの比率は、男女ともに、増加している。特に男性の場合は、3倍も増えている。

表6 親が要介護3~5の状態になったとき望む介護形態

	家族介護のみ	家族介護中心+介護サービス	介護サービス中心+家族介護	介護施設入所(特養・ケアハウス等)	その他	合計	
2004年	男	4.5% (1)	27.3% (6)	31.8% (7)	36.4% (8)	0% (0)	100.0% (22)
	女	8.7% (2)	47.8% (11)	21.7% (5)	21.7% (5)	0% (0)	100.0% (23)
2012年	男	13.6% (3)	31.8% (7)	22.7% (5)	27.3% (6)	4.5% (1)	100.0% (22)
	女	10.0% (2)	25.0% (5)	45.0% (9)	20.0% (4)	0% (0)	100.0% (20)

## 3 自分の状況

### 1) 将来の生活全般に対する何らかの不安

「あなたは将来の生活全般のことを考えるとき、何らかの不安を感じますか」と、質問した。

2004年に比べ、女性は「とても不安」が半減し、「多少不安」が増加している。「不安を感じない」と答えた人も、2004年に比べ3.5%も減少しているが、男性の場合ほとんど変化は見られない。

表7 将来の生活全般に対する何らかの不安

		とても不安	多少不安	不安を感じない	合計
2004年	男	17.2% (5)	69.0% (20)	13.8% (4)	100.0% (29)
	女	27.6% (8)	58.6% (17)	13.8% (4)	100.0% (29)
2012年	男	16.7% (5)	70.0% (22)	13.3% (4)	100.0% (30)
	女	13.8% (4)	75.9% (22)	10.3% (3)	100.0% (29)

## 2) あなたが感じる生活に関する不安

上記の間で「とても不安を感じる」「多少不安を感じる」と回答した人に、「あなたが感じる生活に関する不安な点はどのようなことですか」と、質問した。

2004年に比べ、2012年の意向では、生活全般に関して女性の方に不安が少なくなっているのが特徴的である。「一人暮らしになること」に関しては、男性も4.8ポイント減少しているが、女性は20.3ポイントも減少している。「人（近隣・親戚）との付き合い」では、32.0%から0%へと大幅な現象である。そのほかには、「社会の仕組みに対する変化」や「だまされたり、財産を失う事」が減少している。

2004年と2012年の順位で見ると、男性では1位から4位まで変化がないが、女性では、2004年で1位だった「生活のための収入」が4位に、2004年に同率2位だった「健康や病気のこと」が1位になっている。

表8 あなたが感じる生活に関する不安（複数回答）

	2004年		2012年	
	男	女	男	女
健康や病気のこと	54.2% (13)	60.0% (15)	46.2% (12)	61.5% (16)
身体の不自由・介護が必要	45.8% (11)	44.0% (11)	46.2% (12)	50.0% (13)
一人暮らしになること	25.0% (6)	28.0% (7)	19.2% (5)	7.7% (2)
生活のための収入	58.3% (14)	52.0% (13)	61.5% (16)	34.6% (9)
人（近隣・親戚）との付き合い	16.7% (4)	32.0% (8)	15.4% (4)	0% (0)
子どもや孫の将来	41.7% (10)	36.0% (9)	30.8% (8)	34.6% (9)
親や兄弟の世話	20.8% (5)	16.0% (4)	19.2% (5)	11.5% (3)
社会の仕組みの変化	33.3% (8)	28.0% (7)	15.4% (4)	7.7% (2)
生活様式・人々の考えの変化	12.5% (3)	4.0% (1)	3.8% (1)	0% (0)
だまされたり、財産を失う事	16.7% (4)	12.0% (3)	3.8% (1)	0% (0)
介護サービスの不足	12.5% (3)	28.0% (7)	15.4% (4)	15.4% (4)
その他	0% (0)	4.0% (1)	0% (0)	3.8% (1)
回答者数	24	25	26	26

## 3) あなたが日常生活の大部分を他者の世話（要介護3～5の状態）を必要とする状態になったとき、生活したい場所

あなたが日常生活の大部分を他者の世話（要介護3～5の状態）を必要とする状態になったとき、生活したい場所はどこかと質問した。

1番目に「介護施設入所（特養・有料老人ホーム等）」がきて、2番目に「自分の家(今住んでいるところ)」が来ているのは2004年も2012年も同じだが、男女ともに、2004年よりも2012年の方が男性で5.3・女性で11.5ポイントも施設入所が高くなっている。また、2004年の回答で「娘の家」と男女ともに答えていたのが今回は0%となっており、2004年「息子の家」は男女ともに0%であったのが、女性では「息子の家」と7.4%が回答している。

表9 あなたが要介護3～5の状態になったとき、生活したい場所

		自分の家（今住んでいるところ）	娘の家	息子の家	介護施設入所（特養・有料老人ホーム等）	その他	合計
2004年	男	44.8% (13)	3.4% (1)	0% (0)	48.3% (14)	3.4% (1)	100.0% (29)
	女	34.5% (10)	6.9% (2)	0% (0)	55.2% (16)	3.4% (1)	100.0% (29)
2012年	男	42.9% (12)	0% (0)	0% (0)	53.6% (15)	3.6% (1)	100.0% (28)
	女	25.9% (7)	0% (0)	7.4% (2)	66.7% (18)	0% (0)	100.0% (27)

4) あなたが日常生活の大部分を他者の世話（要介護3～5の状態）を必要とする状態になったとき望む介護形態回答者に、自分が日常生活の大部分を他者の世話（要介護3～5の状態）を必要とする状態になったとき、どのような介護形態を望むか質問した。

2004年・2012年共に第1位は介護施設入所であるが、2004年に比べ2012年では男性は5.3ポイント減少しているが、女性は6.9ポイント増加している。また、家族介護のみに関しては、男性では微増であるが、女性は0%から4.2%と増加している。

表6の親が日常生活の大部分を他者の世話（要介護3～5の状態）を必要とする状態になったとき望む介護形態と比較してみると、親に対しては男性が「家族介護中心+介護サービス」と回答し、女性は「介護サービス+家族介護中心」と回答しているように、未だ日本の特徴として、親の介護は家族が担う必要があるという考えの人が多いが、自分のこととなると、介護体験が多いであろう女性の方が、男性に比べて16.1ポイントも高く施設に入所して、子どもの世話にはならないという意志を強く持っているのが分かる。

表10 あなたが要介護3～5の状態になったとき望む介護形態

		家族介護のみ	家族介護中心+介護サービス	介護サービス中心+家族介護	介護施設入所（特養・ケアハウス等）	その他	合計
2004年	男	13.8% (4)	27.6% (8)	6.9% (2)	51.7% (15)	0% (0)	100% (29)
	女	0% (0)	29.6% (8)	11.1% (3)	55.6% (15)	3.7% (1)	100% (27)
2012年	男	14.3% (4)	17.9% (5)	14.3% (4)	46.4% (13)	7.1% (2)	100% (28)
	女	4.2% (1)	16.7% (4)	16.7% (4)	62.5% (15)	0% (0)	100% (24)

#### 5) 収入を伴う仕事

2004年と2012年で大きな増減が男女ともにあった項目は、増加の部分では、「自営農林漁業」「自営商工サービス業」「会社または団体の役員」「臨時・日雇・パート」の5種類で、減少しているのは「常勤の事務・技術系」「仕事はしていない」の2種類である。

特に女性では「仕事をしていない」と回答した人が22.6ポイントも減少しており、「自営農林漁業」で12ポイントも増加している。男性は「常勤の事務・技術系」で24.6ポイントも減少しており、「臨時・日雇・パート」で15.2ポイントも増加している。

表11 収入を伴う仕事の内訳

	2004年		2012年	
	男	女	男	女
自営農林漁業	12.0% (3)	0% (0)	26.9% (7)	12.0% (3)
自営商工サービス業	0% (0)	3.4% (1)	3.8% (1)	12.0% (3)
会社または団体の役員	16.0% (4)	3.4% (1)	23.1% (6)	8.0% (2)
常勤の事務・技術系	40.0% (10)	6.9% (2)	15.4% (4)	4.0% (1)
常勤の労務系	8.0% (2)	13.8% (4)	3.8% (1)	4.0% (1)
常勤（パートタイム）	4.0% (1)	3.4% (1)	0% (0)	12.0% (3)
臨時・日雇・パート	4.0% (1)	10.3% (3)	19.2% (5)	12.0% (3)
仕事はしていない	16.0% (4)	58.6% (17)	7.7% (2)	36.0% (9)
合計	100% (25)	100% (29)	100% (27)	100% (25)

文献

- 小窪輝吉 (2006)『離島の離島における高齢者の自立生活と地域の役割に関する研究』平成15年度～17年度科学研究費補助金(基盤研究(B))  
研究成果報告書
- 田中安平 (2006)「奄美大島の離島における地域住民の生活と福祉ニーズ」『介護福祉学』vol.13 No.2
- 岩崎房子・小窪輝吉・田中安平他 (2013)「奄美諸島と八重山諸島における高齢者の生活と福祉ニーズ」『鹿児島国際大学福祉社会学部論集』  
第32巻第1号
- 田中安平・小窪輝吉・岩崎房子他 (2014)「奄美諸島と八重山諸島における地域住民の生活と福祉ニーズ」『鹿児島国際大学福祉社会学部論  
集』第32巻第4号

# Life Styles and Social Welfare Needs of the People on the Kakeroma Islands

: A Study of Comparison in the Course of two Researches in the Elderly (1)

Yasuhira TANAKA, Teruyoshi KOKUBO, Fusako IWASAKI  
Yoichi TABATA, Tadao TAKAYAMA

Setouchi Town which lies to the south of Amami Oshima is an island in Kagoshima prefecture. Setouchi Town consists of three remote islands which have administrative districts. According to the research in 2004, in Kakeroma Island, 60.91% of Shiba district and 75.0% of Kedomi district were super-aging society; in Uke Island, so were 58.0% of Ukeamu ro district and 55.7% of Ikeji district; and 52.9% of Yoro Island, too. And these districts were in difficult condition to continue as villages in 2004.

Comparing the above with the conditions in these districts eight years later based on the research in March, 2014, we will discuss the problems and possible measures.

**Key Words:** Kakeroma Islands, Comparison in the Course of two Researches, Feeling that life is worth living